

陶邑窯跡群試料を用いた近畿地方における地磁気永年変化の再検討 Reexamination of geomagnetic secular variation in Kinki District using samples from Suemura kilns

吉村 巧^{1*}, 望月 伸竜², 渋谷 秀敏³

YOSHIMURA, Takumi^{1*}, MOCHIZUKI, Nobutatsu², SHIBUYA, Hidetoshi³

¹ 熊大・理・理学, ² 熊本大学大学院先導機構, ³ 熊本大学自然科学研究科

¹Fac., Sci., Kumamoto Univ., ²Pri., Org., Inn., & Exc., Kumamoto Univ., ³Department of Earth Sci., Kumamoto Univ.

1960-70年代に、大阪府堺市周辺で大規模な宅地造成工事が行われ、それに伴い膨大な古窯跡が発掘された。それら古窯跡は詳細な考古学的研究が行われ、考古地磁気研究も、当時の大阪大学・川井研究室が行った。その結果、5世紀から10世紀の地磁気永年変化曲線が決定されている。しかし、その測定は無定位磁力計によるもので、また、消磁も行われていないと言う問題点があった。幸いそれらの試料は現存しており、大阪大谷大学で保管されている。そこで、これらの試料について再測定を開始した。試料数は全部で4000個に上り、その内、約1000個を本研究のために熊本大学に移した。今回はその中から19サイト213個について、スピナー磁力計による自然残留磁化(NRM)再測定と交流消磁の結果について発表する。

交流消磁を行うと、川井研究室による測定結果に比べ、各サイトのkは一般的に大きくなり、平均すると約4倍、最大で21倍にまで改善した。これは、スピナー磁力計による測定精度の向上と交流消磁による安定磁化成分の抽出の両方の影響を反映したものだだろう。また、年代別で見ても各サイト平均方位の集中度は増したが、永年変化曲線とは一致しないため議論が必要である。

キーワード: 陶邑窯跡群, 考古地磁気学, 地磁気永年変化

Keywords: Suemura kilns, Archeomagnetism, Geomagnetic secular variation